



TITLE:

# 日本におけるアルトーの受容：演劇論を中心に

AUTHOR(S):

坂原, 眞里

---

CITATION:

坂原, 眞里. 日本におけるアルトーの受容：演劇論を中心に. 仏文研究  
1992, 23: 161-180

ISSUE DATE:

1992-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137786>

RIGHT:

# 日本におけるアルトーの受容

## — 演劇論を中心に —

坂 原 眞 里

アントナン・アルトーが日本に初めて紹介されたのは、いつ、どのような形によってであったのか。戦後の文献目録による我々のこれまでの調査では<sup>1)</sup>、1956年『ユリイカ』に載った「アントナン・アルトオ論」(篠田一士)が、最初の資料として上がって来る。ところが、『図書新聞』(1979. 1. 13)のコラム<sup>2)</sup>は、アルトー紹介の端緒を切ったのは1949年の『世界文学』誌ではないかと書いている。『フランス＝アジー』誌が、1948年に没したアルトーの特集を組み、同誌の訳載許可を得ていた『世界文学』が、その特集からアルトーの詩二篇を伊吹武彦訳で取り上げたのだという。確かに、『世界文学』34号(1949年7月)には、「ポエム」「追伸」の翻訳の他、「プチ・プロボ」(西田義郎)に解説があり、アルトーは、ボードレール、ランボー、ロートレアモンの系譜に連なるシュルレアリスム詩人として紹介されている。従って、少なくとも第二次世界大戦後約4年を経た時点には、アルトーの詩が日本語に訳されていたことになる。それ以来、50年代から60年代の前半にかけて文献はわずかだが、60年代の半頃から今日に到るまで、アルトーの名前は、ほとんど途切れることなく日本の書誌に登場し続けて来ている。

フランスでは、すでに1979年に、『アルトー、批評の決算<sup>3)</sup>』という大部の書籍が出版され、アルトーを巡る言説の整理と展望が試みられていた。ガリマール社の全集刊行もようやく最終段階に入り、アルトー研究も異なる局面を迎えている今、アルトーが日本においてどのように紹介・研究され、どのような反応を受けたかについても、振り返っておくべき時期であると感じる。本稿では、戦後から1980年代に到るアルトー受容の過程を、本稿末に上げる文献年譜に基づいてまず概観し、次いで、特に演劇関係にしばって検討してみたい。

なお、文献年譜には、調査した目録に挙がっている日本語文献を全て掲載し、さらに、外国語の文献および邦訳の参考文献の主要なものを付け加えた。本文で言及する文献の内、年譜に収録されているものは特に注記せず、必要に応じて引用ページを記した。

## I. 詩 — 演劇 — 現代思想（戦後から今日まで）

アルトーのテキストの翻訳、アルトーに関して日本語で書かれたテキスト、それに、雑誌の特集および単行本収録テキストはまとめてそれぞれ1点として数え、文献の総数を比較すると、40年代は1点、そして50年代の2点が60年代には約7倍の数になり、70年代が最も多く約65点、80年代が約50点という推移を見せている。

50年代の文献は、詩人としてのアルトーを論じたもの（1956）と、『世界名詩集大成』（1959）に収められた詩の翻訳である。そもそも、『図書新聞』のコラムが日本初かもしれないとしている『世界文学』掲載の文献が、アルトーを詩人として紹介していたが、50年代の文献も、同じ傾向を見せている。『世界名詩集大成』への収録は、日本の研究者・翻訳者が出会ったアルトーは、すでに認められた詩人であったことを示している。フランスでは、1957年に『カイエ・ルノー＝バロー』誌が「アルトーと現代演劇」特集を組んでいたが、日本で演劇面への関心が文献に現れるのは、1965年の『演劇とその形而上学』の翻訳出版以降のことである。2年後の1967年には、残酷演劇をめぐる初めての論考が現れている。

一方で、多方面からのアプローチが始まる。それには、演劇論集の訳者による部分的な伝記紹介（1964）や、フランスで相次いで出版された、異なった視点を持つ著作が関連しているものと考えられる。医師による精神分裂病の症例分析的側面の強い著作（1964）、アルトーの演劇活動をタダ・シュルレアリスム演劇の枠組みで論じたもの（1967）。思考が考えることの不可能であり、存在は存在の欠如であるところから来る苦しみ、アルトーの問題であり、また、詩の発生の根源であると論じたブランショ（1959、邦訳1967）、そのブランショはアルトーの問題を、ヘーゲルが例証した「生から切り離された思考」としての精神へと送り返していると指摘したデリダは、思考の不可能と差異なき生の探究というアルトーの問題において演劇が必然であること、またそこにおいて西洋文明の根幹が批評されていることを論じた（1967、邦訳1983）。『アルトー、批評の決算』でヴィルモは、ブランショの文章がのちのアルトー論に決定的なものとなったと書いたが、日本でも同様の事情が認められる。また、ここに挙げた論考の内、60年代に邦訳が出ていたのはブランショのもののみである（1967）。1967年に、『現代詩手帖』誌は2号に渡ってアルトー特集を組んでいるが、その掲載テキストは、こうした多様なアプローチとアルトーの問題の核心へと向かう関心とを反映している。60年代の終わりから70年代へと、この傾向は続き、さらに、文化人類学、文明論、言語論等の切り口を持つ論考が書かれて行く。また、ゴッホ論（1969）や手紙など、詩と演劇以外でもアルトーのテキストの翻訳紹介が行われる。

しかし、邦訳アルトー全集の企画は、第一巻発刊（1971）以後途絶えてしまった。70年代にお

けるこの他の主な翻訳は、単行本による『ヘリオガバルス』（1977）である。一方で、ソングやソレルスやテヴナンによるエッセーなど、外国語で書かれたテキストの邦訳が進む。特に、ジャン＝ルイ・ブローによる伝記の翻訳（1976）は、アルトーの生涯に関する情報を豊かにした。また、1974年に『ユリイカ』が出した特集号には、晩年のアルトーに触れる文も取り上げられている。フランスでは、『オブリック』誌が大部の特集を組み（1976）、ヴィルモの『アルトー、批評の決算』が出たのもこの時期（1979）である。見取り図が必要と感じられるほど、アルトーについての言説が多数に上り、アルトー評価が一定の歴史を持つに到ったということである。しかし、日本に関して何よりも注目すべきなのは、演劇人がアルトーに反応したことである。この点については次章でより詳しく触れるが、1973年寺山修司と鈴木忠志の間で交わされた演劇とベストをめぐるやり取り、そして、このやり取りを踏まえてアルトーを再読する津野海太郎の論考は、アルトーの日本における紹介が知的情報にとどまるものではなく、演劇実践の場で検討を受けるものであったことを示している。

80年代の前半は、シュルレアリスム関係の出版物の中でアルトーのテキストが紹介される一方で、舞台活動の現場に近いところでアルトーの特集を組む『肉体言語』のような雑誌があったが、全般に、現代思想を介しての関心が大きくなって来る。『ユリイカ』の特集号（1988）のタイトル「アルトーまたは＜器官なき身体＞」が、そのことを端的に語っている。＜器官なき身体＞は、アルトーが晩年に書いた断章（1947）の一つに由来する表現である。ドゥルーズとガタリが、それを、構造や形式への分節化に無縁な運動やエネルギーの流れとしてクローズアップし、資本主義近代を論じる共著（*L'Anti-Edipe*, 1972 et *Mille Plateaux*, 1980）によって有名にしていた。＜器官なき身体＞は、アルトーの名を越えて、現代思想の一つのキーワードとなっていたのである。上述の断章と関連の深いアルトーの「神の裁きにけりをつけるため」は、『肉体言語』の特集に訳出されていたが（1983）、ドゥルーズ、アルトーに詳しく、評論活動を展開している宇野邦一が、1989年に単行本として邦訳を出す。また、高橋純は、70年代後半から引き続き、主体から身体へというテーマで、超越的主体に還元され得ない、言葉に裏切られ、かつ、言葉の生成の場として必然である身体を、アルトーのエクリチュールに読んでいる。

90年代に入って、フランスで、アルトー晩年に焦点を当てた研究書が相次いで2点出版された。アレルの『アルトーの生と死 — ロデーズの滞在』とジャン＝ミシェル・レイの『詩の誕生』である。いずれも、アルトーのエクリチュールに沿った読みに基づいている。フランスにおけるアルトー全集は、ようやく最晩年のカイエの編集に到っている。70年代末にヴィルモが求めているテキストの厳密な読みが、アルトーの全貌について促されて来ている。このことは、次章で見るように、『演劇とその分身』が圧倒的な位置を占めた演劇論と、その日本における受容の現状についても同様である。

## II. 演劇論の受容

戦後から50年代を通じて、日本におけるアルトーはまず詩人だった。演劇理論家としてのアルトーの紹介は、1965年10月、*Le Théâtre et son Double* の翻訳（『演劇とその分身』、邦訳『演劇とその形而上学』）に始まる。

1938年に出版された原著は、1944年に再版されたが、それ以後長らく絶版になっていた。ガリマール社による全集の刊行が1956年に始まり、1964年には第4巻まで進んだ。それにより、『演劇とその分身』はもとより、『舞台装置の進化』（1923年執筆）から『チェンチー族』（1935年執筆）まで、実際の演劇活動との関わりの中でアルトーが書き記した主なテキストが、まとめて読めるようになった。つまり、実践から遠ざかる以前の、アルトーの演劇観が俯瞰できる資料が揃ったことになる。さらに、『カイエルノー＝バロー』の特集号（1957）が1966年に再版される。こうした中で、アルトーに対する関心において、演劇の占める比重が高くなる。60年代のアルトーについての論評の5分の4は演劇に関わるものだったと、『アルトー、批評の決算』は記している。

*Le Théâtre et son Double* の邦訳（安堂信也）刊行は、まず、このようなフランスでの反響に対する、日本のフランス語関係者や出版関係者の反応を映したものだだろう。2年後の1967年には、学術雑誌に、『アントナン・アルトーにおける＜残酷劇＞について』と題された論考（永戸多喜雄）が出ている。1965、66年に発表され、67年に単行本（*L'Écriture et la Différence*）に収録されたデリダの論も引いて、残酷演劇とは、不可能な生の上演を巡る空間の詩学であるとしている。「もうひとつの演劇」（塩瀬宏、1967）も、アルトーは「表現行為自体がその不可能性の告白であるような地点に、生と直接触れることばを求めた点で」特異である書き、ブランショによるアルトー論の流れを汲んで類似の論調を示している。こうした論考は、アルトーの演劇論およびアルトーが提出する問題の核心に触れる重要なものだが、アルトーの現実構築への希求よりも、アルトーの演劇論の上演不可能性に、大きな比重を置いた結論を導かせ易いものでもある。60年代末には、中村雄二郎のように、フランスでの観劇体験を通じて、アルトーの問いかけが本質的であることを認識するケースも出る。とはいえ、60年代は、日本ではアルトーを語る者は演劇の外に位置していて、そのためにアルトーの聖化、伝説化、神話化が進む傾向にある（「失格した劇作家」竹内健、1967）と苦言が呈される状況があったようだ。

当時の日本の演劇状況は、大枠において、現象面でフランスの状況にほぼ対応していた。新劇批判を大きな契機として、根本的な問い直しが行われたが、その新劇が模倣していたのは、当時のフランス演劇が問い直していた西洋近代リアリズム劇だった。そして、その問い直しが、劇場、戯曲、演出家、俳優、演技、舞台と観客の関係の全てにおいて、多様な試みを生み出した点でも

両者にパラレルな現象が認められる。1953年にパリで初演されたベケットの『ゴドーを待ちながら』が、1960年に日本で日本語で上演される。1963年には、東西演劇シンポジウムにイヨネスコが来日している。同じ年に、映画館アートシアター新宿文化が、アングラ・小劇場運動の一つの象徴的な場所となる地下劇場を解放している。『演劇とその形而上学』の出版は時宜にかなっていた。しかし、時代の演劇変革を担った人々がアルトーについて語り始めるには、70年代を待たねばならない。

70年代に入ると、演劇を中心にした文献が全体の約半数に達する。フランス語関係者・研究者の手になるものがその3分の2を占め、やはりフランスでのアルトー評価・研究に呼応した紹介が多い。デリダ、ドゥルーズ、ブランショ、シャルボニエの名を挙げて、参考文献が明示されている「肉体の言語」(渡辺守章, 1970)などの他、ヴィルモの *Artaud et le Théâtre*(1970)に符合する「アルトーと現代演劇 — アルトーとその影をめぐって」(渡辺淳, 1970)や「アルトーと現代演劇」(利光哲夫, 1974)、また、ベアールの *Le Théâtre dada et surréaliste*(1967)が出版され、シュルレアリストとしてのアルトーが再評価されていたフランスの空気を伝える「前衛劇の先駆 — アルフレッド・ジャリ劇場をめぐって」(利光哲夫, 1971)など。さらに、端的にフランスにおけるアルトー関係の近刊書を挙げた「フランスにおける最近の演劇書 — アルトーとピアン」の再評価のことなど(渡辺淳, 1974)もある。興味深いのは、これらの文献の多くが、それぞれの筆者の観劇体験や演劇観を反映している点である。滞仏中に見た舞台に触発されたというものや(「アルトーとグロトフスキー」利光哲夫, 1970)、アルトーとブレヒトの融合を提言するもの(「続・スペクタクル芸術考 — 1 — 」渡辺淳, 1975)がある。同じアルトーを語って、クロード・デルを想起するもの(「肉体の言語」渡辺守章, 1970)がある一方で、秋浜悟史と劇団民芸に言及するもの(「アルトーと現代演劇 — アルトーとその影をめぐって」渡辺淳, 1970)がある。これは、アルトーに読み手それぞれによる同時代的関心が寄せられていたということであり、さらに、それは日本の演劇シーンへの関心と交差してもいたということである。最後に挙げた渡辺淳の文には、アルトーの風俗化、政治や行動への短絡の批判があり、アルトーが巷間で読まれ、様々な反応を呼んでいたことを示している。

バリ島演劇に感嘆し、「東洋演劇と西洋演劇」を論じたアルトーは、比較演劇の視点を触発して当然だったし、また、アルトーにとっての東洋演劇が問われることにもなった。日本の現代演劇は、西洋近代劇の模倣を問い直す中で伝統芸能に新たな着想を求めていたのである。この点では、「混沌の形而上学 — アルトーとバリ島の演劇」(渡辺守章, 1970)が、プロンコの「東と西の演劇 — 全体演劇への展望」を手がかりに、アルトーにとってのバリ島演劇を論じ、千田是也は、「東西の演技におけるくしぐさ」的なもの — 特にアルトー、グロトフスキー、リヴィング・シアター、テラヤマの理論と実践を考慮しての — と題された、エルンスト・シューマッハーの説を翻訳している(1977)。シューマッハーは、アルトーらの俳優と観客の内的浄化・解放を目指

す非合理的な形式と、社会的ゲストゥスにより観客を教化するプレヒトの形式を対立させ、西洋における人間の個体化・社会化の問題に答えるにふさわしいしぐさ言語の探究はプレヒトの側にある、と結論している。俳優座を創立した近代俳優術の理論家が翻訳者であり、シューマッハーが退けた形式を採る一派に寺山修司が含まれていることに、当時の日本の演劇地図が透けて見える。

日本におけるアルトーの受容において70年代に特筆すべきことは、アルトーの演劇論に絡んで演劇人の中で論争めいたものがあったことである。しかし、それはアルトー対プレヒトの図式によるものではなかった。アルトーの影響を言明していた寺山対したのは千田ではなく鈴木忠志であり、二人のやり取りを、のちに津野海太郎が再考する。三人は、所属劇団は異なるが、ともに現代演劇史上のアングラ・小劇場運動と呼ばれる同じ動きの中にいた。

1973年、「呪術としての演劇」で、寺山は俳優をペストのような演劇状態を生むく接触の媒介>、演劇を他人にとりつきそれを腐食し変容に持ち込む、政治を通さない革命であると書いた。劇団天井桟敷結成の年（1966）に初めてアルトーを読んだという寺山の、アルトーの「演劇とペスト」への共鳴は明らかだった。このあと間もなく、鈴木が、ペストはもはや毒性を持たないから寺山の立場は時代遅れだと反論して、内部で増殖する<癌のような演劇>を提唱する（「現代演劇ペストからガンへ」）。ただこれだけで終わったやり取りであり、鈴木は反論はあくまでも寺山の立場に対してのもので、アルトーの演劇理論を狙上に乗せたわけではなかった。翌年『ユリイカ』のアルトー特集号で、二人はともに筆を取っている。寺山は、今度は「残酷の演劇宣言」に触れて、演劇生成にとってのその根源的な示唆を認め、異論も織り混ぜながら、天井桟敷の<残酷演劇>的試みを列挙している（「<残酷の演劇>その解釈と鑑賞」）。鈴木は文にアルトーの言及はない。西洋演劇と日本伝統芸能の比較を、演技意識の違いに見ようとしている（「騙りの演技」）。鈴木は、寺山とのやり取り以前に書いた文の中でアルトーの名を引いたことがあったが（「たかだか芝居にできることは」1971、「混迷の西欧前衛劇」1972）、アルトーの演劇論が内包する文明論の激しさに対する消極的態度や、西欧の舞台の東洋趣味に対する懐疑を表明する文脈においてだった。

1975年、津野は「だれがペストを殺すのか — アントナン・アルトーを再読する」を書く。そこで、寺山は、アルトーの意図に反して、ペストを外から持ち込むネズミに俳優をたとえ、その寺山を、鈴木は、あれはアルトーだと言ったのだから、二人はともにアルトーを理解していないと断じた。アルトーは、「演劇の革命をペスト世界の意識革命に同調させようとした」（p. 47）のであり、「都市の政治的空間とひとりの人間の身体的空間とが、相互に同一であり得るような[……]世界構造を、ペストの分身としての演劇の場で経験可能なものとして実現しようとした」

（p. 52）と津野は読み説き、西欧の植民地主義がペストを第三世界に追いやる過程と、外悪を遮断する場としての近代劇場成立との、歴史的な連続性に筆を進める。

津野は、アルトーの「演劇とベスト」に着想を得た論をさらに展開して、1980年に『ベストと劇場』と題した単行本を出す。これには、アルトーの演劇論を語ったテキスト二点の他、「ベストか癌か — 寺山修司・鈴木忠志論争」が収録され、1973年の寺山と鈴木とのやり取りが再考されている。津野は、二人の説を、外からベストを持ち込むか、内で癌のように繁殖するかに大別し、両者の間に、それぞれの著作『書を捨てよ町へ出よう』と『内角の和』との差を認めている。つまり、二人の演劇人は、それぞれの演劇観を通じてアルトーを読んだということになる。ところで、津野のアルトー論自体も、主に津野（および演劇センター68/70）の演劇観が共鳴した部分で読まれていなかっただろうか。津野自身の言葉を借りれば、「アングラ演劇運動の中で、近代演劇を構造的に把握する手がかりとして劇場を選んだ」（上掲書、p. 172）人の、アルトー論であるように思える。そもそも、鈴木と寺山自身の演劇論も、内か外かに要約してしまえるものではなく、その後の時間的推移や、時代の状況と感性に対して虚と実が取るベクトルなどを考慮すれば、演劇論・演劇史上、より興味深い問題を含んでおり、それは津野の演劇に関しても同様だろう。ともかく、ここで確認しておきたいのは、時代の演劇変革の動きを担った人々が、実践のなかでアルトーに出会い、スタンスは様々ながら、アルトーの演劇論を考え、語っていること、その姿勢と言葉の具体的な力によって、これら演劇人の取り組みが、アルトーの読みにおいても、日本におけるアルトー受容の70年代においても、重要だということである。そして、この出会いが、寺山修司と天井棧敷においては明らかに豊かな成果を生んだことは、自他ともに認めているところだった（『寺山修司演劇論集』、1983）。

60年代の文献は、生の上演不可能性というアルトーが提出した問題と演劇論が交差する核心によって、その独自性を説いた。これに対して、70年代の文献は全般的に、アルトーの演劇論の実践への示唆に目を向けたと言える。ただし、そのほとんどは「演劇とその分身」に基づいていた。70年代中頃、フランスではアルトー全集10巻から13巻までが出版されている。ロデーズ滞在中からパリ帰還後に渡る手紙や、「神の裁きにけりをつけるため」「残酷演劇」などの晩年の重要なテキストも、まとめて読めるようになっていたわけである。ところが、日本でこの時期にアルトー晩年の演劇観に触れているのは、「分身、あるいは回帰する力」（渡辺守章、1974）のみである。アルトー全集の翻訳は、1971年の第一巻以後続かなかった。そののち演劇関係のテキストは1983年『肉体言語』誌のアルトー特集まで翻訳されていない。この特集を組んだ編集部は、権威として引用されながら軽くやり過ごされているのがアルトー受容の現状であるとし、全集翻訳刊行の挫折が体系的理解を困難にしていると嘆いている。この特集に、アルフレッド・ジャリ劇場関係のテキスト、舞台のための小品、晩年の演劇論が訳出されているのは、この現状認識に立ったものだろう。アルトーに強い関心を寄せる人々たちによるらしいこの特集は、翻訳にやや問題があるが、80年代にもなお実践の場近くでアルトーを読もうとする人々がいること、しかし、一方で、アルトーへの反応は一般に鎮静化していることを示している。



80年代の文献に見られる一つの大きな傾向は、アルトーの演劇論を巡る言説が再考と反芻の時代に入っていることである。非ヨーロッパ文明に向かったアルトーを、アジア的と言われる身体との関連で問う「アルトー・バリ島演劇・メキシコ」(小沢秋広, 1985)や、現代演劇の他の担い手たちとの共通項でアルトーに触れる「バロックと現代演劇 — クローデル, アルトー, ゲルドロード, オーディベルティ」(利光哲夫, 1984)などの、70年代に試みられた形式のアプローチがある。また、上演不可能というパラドクスを根幹とするが、重要な問題をはらむ演劇論という、アルトーの演劇論を読解する際の、60年代に提出されていたトーンの変奏を示す「アルトーあるいは演劇」(齊藤公一, 1982)や《L'Idée du Théâtre chez Artaud et les Caractères ontologiques de l'Affectivité》(高橋純, 1983)などがある。このトーンの大きな拠り所であった、デリダの『エクリチュールと差異』が翻訳されたのが1983年である。さらに、すでに発表されていたテキストが、再び誌上に掲載されたり単行本に収録される。1969年に『文学』に発表された中村雄二郎の文が、『言葉・人間・ドラマ』に入り(1970)、再刊(1981)される。1974年の『ユリイカ』特集号に載った寺山の文が、『シュルレアリスム読本3』(1981)に出る。津野は、「だれがペストを殺すのか — アントナン・アルトーを再読する」を出発点とする様々な論考を、『ペストと劇場』(1980)にまとめる。

このような傾向は、まとまった形での翻訳紹介が進まないままに、アルトーの演劇論と時代の演劇の緊迫感ある出会いが過去になった時点に、アルトーの演劇論とは何かという知識や確認と、過去の出会いが体験した実践の可能性の証言とが求められたのだと考えさせる。また、フランスでも日本でも、演劇シーンはほぼ同時代的に大きく変化し、舞台は変革と非日常性の世界から、メタシアター、ミニマリズム、イメージの演劇といった言葉で捉えられる世界へと移っていた。1982年、『夜想』誌が『チェンチー族』にスポットを当てた特集を組み、同年、劇団天井桟敷がこの作品を舞台化している。それは美しい舞台だったらしい(『「チェンチー族」は呼吸する』梅本洋一, 1982)。しかし、それがこうした演劇状況と同時代を生きる中での、アルトーについての言説の傾向を大きく変えたとは思えない。アルトーの影響を明言していた寺山修司は、翌1983年に死亡。このことに、一つの時代の終わりを感じた演劇関係者は少なくなかった。『寺山修司演劇論集』(国文社)が出たのは、その年である。

フランスでも1981年に、コメディ・フランセーズが、ジャック・バイヨン演出で『チェンチー族』を上演していた。評判は芳しくなく、批評はごぞって、アルトー自身の演出から切り離された上演を問題視していたという(M. ワッセルマン「アントナン・アルトーと『チェンチー族』」『夜想』)。上演企画も、舞台に対する反応も、どこか考古学的な印象を与える情報である。

以上、文献年表に照らして、アルトーの演劇論が日本においてどのように読まれ、どのような反応を受けて来たかについて検討した。

60年代の文献に、アルトーを語る人間は演劇の外に位置しているために神話化が進んでいるという指摘があった。70年代には、60年代半ばから日本の演劇変革の中心にいた演劇人によって、アルトーの演劇論は、その具体的可能性への示唆において読まれ、論じられた。それには、1965年の『演劇とその分身』邦訳が、決定的な役割を果たしていた。80年代、そして90年代へと、状況は変化し、アルトーの演劇論へのアプローチには、異なった取り組みが考えられる。それは、一章の終わりに述べた、全集出版の進行が促しているフランスでの傾向と軌を一にしている。つまり、アルトーのエクリチュールに密着した広範なテキスト・リーディングである。日本では、特に今問題にしている演劇論に関して、梅本洋一がその必要性を指摘していた（『膜・釘・運動』『夜想』1982）。

アルトーの演劇観の生成変容とその背景を読む作業<sup>4)</sup>は、『演劇とその分身』をアルトーの演劇観の全容の中で再考させ、20世紀演劇が歩んできた過程と、その中におけるフランスや日本の演劇空間を、そして、まさに日本におけるアルトーの受容を振り返らせる。と同時に、それは、本稿でたどった紹介・研究・反応のそれぞれがそうであったらうように、同時代的なアルトーの相貌の発見でもあるだろう。

#### アルトー関係日本語文献年譜（アルトーのテキストは執筆者名省略）

1948 : 84, Numéro spécial Artaud 5-6, '48

: France-Asie, Hommage à Antonin Artaud, '48.9

1949 : 「ポエム」「追伸」伊吹武彦訳『世界文学34』世界文学社, '49.7

1956 : 「アントナン・アルトオ論」篠田一士『ユリイカ』〈現代フランス詩人集〉, '56

1957 : 《Antonin Artaud et le théâtre de notre temps》*Cahiers Renaud-Barrault*, 1<sup>re</sup> édition, mai '57 → réédition, 1<sup>er</sup> trimestre '69

1959 : 《Artaud》 dans *Le Livre à venir*, Maurice Blanchot, Gallimard, '59

: 「詩篇（祈り、ミイラの手紙、ぼくは生きていた、ファン・ゴッホ、ぼくがあるところで、夕）」篠田一士訳、「神経の秤」清水徹訳『世界名詩集大成 フランス4』平凡社, '59.11

: *Antonin Artaud — Poètes d'aujourd'hui*, Georges Charbonnier, Seghers, '59

1964 : *Antonin Artaud et son Double*, Dr J. - L. Armand-Laroche, Pierre Fanlac, '64. 4. 20

: 「アヴァンギャルド芸術・さちゅりこん他」『花田清輝著作集3』花田清輝, 未来社, '64.8

: 「アルトーに関する伝記的ノート — 1896~1920年」安堂信也『演劇学』（早大）6, '64.12

- 1965 : 『演劇とその形而上学』 安堂信也訳, 白水社, '65.10.20  
: 「アントナン・アルトー著, 安堂信也訳『演劇とその形而上学』」 竹内健『日本読書新聞』  
1335, '65.12.6
- 1966 : 「書評『演劇とその形而上学』(アントナン・アルトー著, 安堂信也訳, 白水社)」 山内登美  
雄『新劇』154, '66.2
- 1967 : 《Le Théâtre Alfred-Jarry : Antonin Artaud》 dans *Le Théâtre dada et surréaliste*,  
Henri Béhar, la collection 《Les Essais》 N°131, Gallimard, '67 → Nouvelle édition revue  
et augmentée, NRF, Idées/Gallimard, '79 → 『ダダ・シュルレアリスム演劇史』 安堂信  
也訳, 竹内書店, '72  
: 《La Parole soufflée》 《Le Théâtre de la Cruauté et la Clôture de la Représentation》  
dans *L'Écriture et la Différence*, Jacques Derrida, Seuil, '67 → 『エクリチュールと差異』  
下, 梶谷温子他訳, 法政大学出版局, '83.6.20  
: 「アントナン・アルトーにおける<残酷劇>について」 永戸多喜雄『芸文研究』23<佐藤朔  
教授還暦記念論文集 慶応義塾大学芸文学会>'67  
: 「思考の腐食について」 飯島耕一訳, 思潮社, '67.2  
: 「謎について — アントナン・アルトー粗描」 清水徹, 「もうひとつの演劇」 塩瀬宏, 「精神  
くそくらえ (本邦初訳)」 天沢退二郎訳『現代詩手帖』10(7)<特集アントナン・アルト  
ー>, '67.7  
: 「失格した劇作家」 竹内健, 「アルトー」 モーリス・ブランショ, 栗津則雄訳, 「A. アルト  
ーの詩 (空のトリクトラク, ドイツのオルガン, 雪, 祈り, 愛, 罌, ロマンズ, オルガン  
と硫酸, 月, ほか)」(→『シュルレアリスム読本1』, '81.1) 飯島耕一訳『現代詩手帖』10(8)<  
特集アントナン・アルトー>'67.8  
: 「フランスの前衛劇」 ミッシェル・コルヴァン, 石沢秀二・利光哲夫訳, クセジュ文庫, '67.9
- 1968 : 「不条理の演劇」 マーティン・エスリン, 小田島雄志他訳, 晶文社 (晶文選書), '68.10
- 1969 : 「失われた世界の復権」 『未開と文明 — 現代人の思想15』 山口昌男, 未来社, '69  
: 《Antonin ARTAUD et Lewis Carroll》 dans *Logique du Sens*, Gilles Deleuze, Minuit,  
'69  
: 「アルトー」 『来るべき書物』 モーリス・ブランショ, 栗津則雄訳, 現代思潮社, '69.5←  
《Artaud》 dans *Le Livre à venir*, Gallimard, '59  
: 「ゴッホ論 — 社会が自殺させた者 — 1~6完」 栗津則雄訳『芸術新潮』20(7)'69.7  
~20(12)'69.12 → 『ヴァン・ゴッホ』, 新潮社, '71.4  
: 「アルトーのこと」 栗津則雄『芸術新潮』20(7), '69.7  
: 「アルトンへの手紙」 生田耕作訳『パイディア』, '69.8

- ：「コトバとA. アルトーの〈残酷の演劇〉 — 言葉・人間・ドラマ」中村雄二郎『文学』'69.2 → 『言葉・人間・ドラマ』講談社、'70.8 → 青土社、'81.7.18
- ：《Antonin Artaud et le théâtre de notre temps》*Cahiers Renaud-Barrault*, premier trimestre '69 ← 1<sup>ère</sup> édition, mai '57
- 1970：「栗津則雄篇『アントナン・アルトー全集』（現代思潮社）」清水徹『日本読書新聞』1529, '70.1.19
- ：《Antonin Artaud et le Théâtre》, Alain Virmaux, Seghers, '70
- ：「アルトーと現代演劇 — アルトーとその影をめぐって — 上, 中, 下 —」渡辺淳『悲劇喜劇』23 (1) '70.1, 23 (2) '70.2, 23 (4) '70.4
- ：「言語の舞台 — ルソーからアルトーへ」渡辺守章『中央公論』85 (1), '70.1
- ：「肉体の言語 — アントナン・アルトー論」渡辺守章『海』2 (3)〈環境としての演劇特集〉, '70.3 → 『虚構の身体』中央公論社, '78
- ：「言語と人間 — アントナン・アルトーをめぐって —」栗田勇『文学界』24 (3), '70.3
- ：「詩の意味 — 栗津則雄文学論集1967~1969」栗津則雄, 思潮社（現代の批評双書）, '70
- ：「いわゆる〈アルトー事件〉について」清水徹『学燈』67, '70.4
- ：「短剣と杖について」清水徹『ユリイカ』, '70.6
- ：「言葉・人間・ドラマ」（←「コトバとA. アルトーの〈残酷の演劇〉 — 言葉・人間・ドラマ」『文学』, '69.2）中村雄二郎, 講談社, '70.8 → 『言葉・人間・ドラマ』青土社, '81.7.18
- ：「アルトーとグロトフスキー — 1~3完 —」利光哲夫『新劇』17 (8) '70.8, 17 (9) '70.9, 17 (10) '70.10
- ：「混沌の形而上学 — アルトーとバリ島の演劇」渡辺守章『同時代演劇』3, '70.9 → 『虚構の身体』, 中央公論社, '78
- 1971：《L'Art selon Artaud》dans *Poétique de la Prose*, Tzvetan Todorov, Seuil, '71
- ：「アントナン・アルトー粗描」「アルトーの「狂気」の頃」清水徹『廃墟について』河出書房新社, '71.4
- ：「実験演劇論」イエジェイ・グロトフスキー, 大島勉訳, テアトロ社, '71.4
- ：「未知の人アントナン・アルトー, アントナン・アルトー全集内容見本」滝口修造, 現代思潮社, '71
- ：「アントナン・アルトーへのオマージュ」「アンドレ・ブルトン集成7」アンドレ・ブルトン, 栗津則雄訳, 人文書院, '71
- ：「アントナン・アルトー」「現代の反文学」クロード・モーリヤック, 玉井友希夫訳, 山科シルクセンター出版部, '71
- ：「アルトーの神話と反神話 — 錯綜する狂気から劇的祭儀へ」小苺米現『思潮』4, 思潮社,

'71.4

- : 「狂気の証人アントナン・アルトー」小島俊明『詩学』26(3) '71.4
- : 「ヴァン・ゴッホ」栗津則雄訳, 新潮社, '71.4←(「ゴッホ論 — 社会が自殺させた者 — 1 ~ 6 完」『芸術新潮』20(7) '69.7~20(12) '69.12) →筑摩書房, '86.10
- : 「アルトー『ヴァン・ゴッホ』」清水徹『週間読書人』'71.5.31
- : 「阿片の精算」巖谷國士訳『現代詩手帖』, '71.5
- : 「前衛劇の先駆 — アルフレッド・ジャリ劇場をめぐる」利光哲夫『新劇』18(5)〈特集・革命の現代世界演劇〉, '71.5
- : 「マラー／サド／アルトー」『反解釈』スーザン・ソング, 高橋康也他訳, 竹内書店新社, '71.6
- : 「たかだか芝居にできることは」(「変身」パンフレット), 鈴木忠志, '71.9.6→『内角の和 — 鈴木忠志演劇論集』, 而立書房, '73.3
- : 「アルトー, ニジンスキーの狂気<肉体を積む思考> — 内奥での破壊と消失の生」アントナン・アルトー全集』全10巻・別巻1」市川雅『日本読書新聞』1614, '71.9.27
- : 「リヴィエールとアルトー」(アルトー全集・月報1) 栗津則雄, 現代思潮社, '71.10
- : 「<彼方>の拒否・アルトー」(アルトー全集・月報1) 渋谷孝輔, 現代思潮社, '71.10
- : 「ローマ教皇への上奏文」「グライマへの上奏文」清水徹訳, 「ジャック・リヴィエールとの往復書簡」栗津則雄訳, 「冥府の贖」大岡信訳, 「神経の秤」清水徹訳, 「初期詩篇」大岡信他訳, 「初期散文作品」篠沢秀夫訳, 「空の双六」飯島耕一訳, 「ビルボケ」豊崎光一訳他『アントナン・アルトー全集 I』現代思潮社, '71.10
- : 「アルトー『アントナン・アルトー全集 I』」宮川淳『週間読書人』'71.12.20→『宮川淳著作集 II』美術出版社, '80.10
- : 「アントナン・アルトー小論 — 初期詩集と狂気について」小島俊明『東京家政学院大学紀要』11, '71.12
- : 「アルトーの残酷劇」『共同討議 — ことばと世界』栗田勇, 中村雄二郎, 森本和夫, 新潮社, '71

1972: 「詩の意味 — 評論集」栗津則雄, 思潮社, '72

- : *L'Anti-Édipe*, Gilles Deleuze/Félix Guattari, Les Editions de Minuit, '72
- : 「アルフレッド・ジャリ劇場」『ダダ・シュルレアリスム演劇史』アンリ・ベアール, 安堂信也訳, 竹内書店, '72← *Le Théâtre dada et surréaliste*, '67
- : 「<肉>の完全無欠な統一体 — 「アントナン・アルトー全集第一巻」」利光哲夫, 『文芸』11(1) '72.1
- : 「混迷の西欧前衛劇」鈴木忠志『共同通信』'72.5.13 →『内角の和 — 鈴木忠志演劇論

- 集」，而立書房，'73
- 1973：「呪術としての演劇 No.4，密室から市街へ — 俳優論(承前) — 」寺山修司『新劇』，'73.9  
 ：「現代演劇ベストからガンへ，インタビュー〈文化と演劇行為〉10」鈴木忠志『週間読書人』，'73.9.3  
 ：*L'expérience intérieure d'Antonin Artaud*, Danièle André-Carraz, le cherche midi éditeur, '73
- 1974： *Antonin Artaud et l'Essence du Théâtre*, Henri Gouhier, Librairie philosophique J.Vrin, '74  
 ：「生と詩，そして存在の痙攣」清水徹『現代思想』，'74.1  
 ：「アントナン・アルトー論（ザ・ニューヨーカー，1973年5月19日号から）」スーザン・ソントグ，岩崎力訳『海』6（3），'74.3  
 ：「演劇とオカルティスム」利光哲夫『ユリイカ』，'74.7臨増→「反＝演劇の回路」勁草書房，'86.5.30  
 ：「アルトーとメキシコ」岡谷公二，「演劇に憑かれて」P. グッドマン，中村健二訳，「騙りの演技」鈴木忠志，「アルトー状態」ソレルス，岩崎力訳，「アルトーは殺された」（シンポジウム，ソレルス+テルケルグループ），岩崎力訳，「アルトーとノンセンス」高橋康也，「生のさなかのアルトー」テヴナン，利光哲夫訳，「アルトーと現代演劇」利光哲夫，「回想・晩年のアルトー — 向こう岸へ渡った人」ジャン＝ルイ・バロー，G. フェルディエール，ピエール・シャレー，利光哲夫訳，「呪縛された人」ル・クレジオ，望月芳郎訳，「分身，あるいは回帰する力」渡辺守章→「虚構の身体」中央公論社，'78，「〈残酷の演劇〉その解釈と鑑賞」寺山修司→（同一テキスト）「残酷演劇船 — アントナン・アルトーの〈劇〉」『シュルレアリスムの思想，シュルレアリスム読本3』'81.，「年表・アントナン・アルトーの世界，参考文献」以上『ユリイカ』〈増頁特集アントナン・アルトー，演劇空間の現在〉'74.8  
 ：「Artaud-Bataille 試論 — 狂気と悪」西昌樹『京都大学文学部フランス文学研究室研究報告』，'74.12  
 ：「フランスにおける最近の演劇書 — アルトーとピアンの再評価のことなど」渡辺淳『学燈』'71（12），'74.12
- 1975：「続・スペクタクル芸術考 — 1 — 」渡辺淳『心』（生成会）28（2）'75.2  
 ：「だれがベストを殺すのか — アントナン・アルトーを再読する」津野海太郎『新劇』22（7）（8）（10）（11），'75.7/8/10/11
- 1976：「アルトーのペヨーテ体験について」岩井薫『中大仏文研究』9，'76  
 ：「アントナン・アルトー」ジャン＝ルイ・ブロー，安堂信也訳，白水社，'76

- ：「ジュネ／アルトー／ベケット」ロジェ・ブラン，ベッティナー・クナッパ，一羽昌子訳『ユリイカ』，'76.2
- ：「近親相姦と現代演劇」利光哲夫『現代思想』＜総特集近親相姦＞'76.5→『反＝演劇の回路』勁草書房，'86.5.30
- ：「日本とフランスの演劇学 — 危機に照応する関心，西洋演劇の根拠への反省で，マラルメからクローデル，アルトーへ」渡辺守章『東京新聞』，'76.7.28 タ
- ： *Obliques*, 10/11, spécial ARTAUD, '76
- 1977：「ヘリオガバルスまたは戴冠せるアナーキスト」アルトー，多田智満子訳，白水社，'77.5
- ：「アルトーとく芸術と行動」『フランス文学講座 4 演劇』安堂信也，大修館書店，'77
- ：「ハプニングとメキシコ — ル・クレジオ＜アルトー論＞をめぐって」利光哲夫『現代詩手帖』20（6），'77.6
- ：「アントナン・アルトー著，多田智満子訳『ヘリオガバルス — または戴冠せるアナーキスト』」山崎昌夫『図書新聞』59，'77.6.11
- ：「東西の演劇におけるくしぐさ＞的なもの — 特にアルトー，グロトフスキー，リヴィング・シアター，テラヤマの理論と実践を考慮しての — 上」エルンスト・シューマッハー，千田是也訳『テアトロ』417，'77.11
- ：「ロデスからの手紙」小林康夫訳『エピステーマー』，'77.12
- 1978：「東西の演劇におけるくしぐさ＞的なもの — 特にアルトー，グロトフスキー，リヴィング・シアター，テラヤマの理論と実践を考慮しての — 下」エルンスト・シューマッハー，千田是也訳『テアトロ』419，'78.1
- ：「アルトーの場合 — フィジックからメタフィジックへ」渡辺淳『心』31（1）＜“もの”と“こころ”特集＞，'78.1
- ：「Antonin ARTAUD の＜作品＞あるいは＜思考のイマージュ＞」高橋純『人文学報』126，東京都立大学人文学会編，河出書房，'78.3
- ：「ARTAUD の狂気または生と作品の通底器」高橋純『フランス語フランス文学研究』33，'78
- ：「肉体の言語 — アントナン・アルトー試論」（←＜環境としての演劇特集＞『海』2（3），'70.3）「混沌の形而上学 — アルトーとバリ島の演劇」（←『同時代演劇』No.3，'70）「分身，あるいは回帰する力 — アルトー覚書」（←『ユリイカ』，'74.8）「虚構の身体」渡辺守章，中央公論社，'78
- ：「アルトー」利光哲夫『現代思想』6（8）＜特集・現代思想の109人＞，'78.6臨増
- ：「ヴァン・ゴッホとアルトー（絵画と文学の心 — 7 — ）」朝比奈誼，『ふらんす』53（10），'78.10 →『フランス — 絵画と文学の心』，小沢書店，'80.9

- ：「＜残酷の演劇＞の美学」利光哲夫『新劇』25（11），'78.11
- 1979： *Artaud-un bilan critique*, Alain et Odette Virmaux, Belfond, '79
- ：「四条麩屋町下がる — 28 — ＜世界文学＞と京都リトル・ルネサンス — 雑誌検閲・翻訳のことなど — 2 — アルトオはじめ続々と掲載」金関寿夫『図書新聞』137，'79.1.13 / 139，'79.1.27
- ：「ネルヴァルを読むアルトー」田村毅『カイエ』2＜特集・ネルヴァル＞，'79.2
- ：「アントナン・アルトーと『ヘリオガバルスまたは戴冠せるアナーキスト』／およびその書誌」『シュルレアリスムと小説』巖谷国士編，白水社，'79.2
- ：「『虚構の身体』 — 分裂に立ち向かう演劇」渡辺守章『朝日新聞』，'79.2.26
- ：「詩的世界の現象学 — 肉体の言語」『栗田勇著作集10』栗田勇，講談社，'79.11.25
- ：《Le Théâtre Alfred-Jarry : Antonin Artaud》dans *Le Théâtre dada et surréaliste*, Henri Béhar, nouvelle édition revue et augmentée, NRF, Idées/Gallimard, '79 ← la collection 《Les Essais》N°131, Gallimard, '67
- 1980： *Pouvoirs de l'Horreur - Essai sur l'Abjection*, Julia Kristeva, Seuil, '80
- ： *Artaud Vivant*, Alain et Odette Virmaux, Nouvelles Editions Oswald, '80
- ： *Mille Plateaux*, Gilles Deleuze/Félix Guattari, Les Editions de Minuit, 1980
- ：「評伝アントナン・アルトー，1-6」利光哲夫『心』33（3）（4）（8）（9）（10）（11），生成会，'80.3～11
- ：「Héliogabale の名前と ARTAUD」高橋純『人文学報』139，東京都立大学人文学会編，河出書房，'80.3
- ：「都市の空気 — 1720年のマルセーユ」「穴を穿つ — 戦略家アルトー」「ペストか癌か — 寺山修司・鈴木忠志論争」「ペストと劇場」津野海太郎，晶文社，'80.6.30
- ：「ヴァン・ゴッホとアルトー」『フランス — 絵画と文学の心』朝比奈諄，小沢書店，'80.9
- ：「アントナン・アルトー全集1」『宮川淳著作集2』宮川淳，美術出版社，'80.10
- ：「A. アルトーのまなざしの空間と苦悩＜フランス・アート情報＞」『日本読書新聞』2082，'80.11.17
- ：「アルトー＜彼方＞の拒否」『バックスの杖 フランス詩人論』渋谷孝輔，小沢書店，'80.11.20
- 1981：「叫び」「悪しき夢想者」「ドイツのオルガン」「雪」「祈り」「愛」「畏」「ロマンス」「オルガンと硫酸」「月」『シュルレアリスムの詩，シュルレアリスム読本1』飯島耕一訳，思潮社，'81.1←『現代詩手帖』10（8）'67.8
- ：「アントナン・アルトー論 — 鳥・心の詩・演劇」『シュルレアリスムの詩，シュルレアリスム読本1』利光哲夫，思潮社，'81.1←『現代詩手帖』10（8）'67.8



- ：「新言語＝新現実の夢（パリ通信10）」渡辺広士『図書新聞』243 '81.2.28
- ：「トラユマラ」伊東守男訳，ペヨトル工房，'81.3.9
- ：「シュルレアリスム研究所の活動」「真夜中にあるいはシュルレアリスムの脅し」巖谷国土  
訳・解説，ユリイカ13（6）＜総特集ダダ・シュルレアリスム＞，'81.5臨増
- ：「残酷演劇船 — アントナン・アルトーの＜劇＞」『シュルレアリスムの思想，シュルレア  
リスム読本3』寺山修司，思潮社，'81.6←「アルトーの＜残酷の演劇＞その解釈と鑑賞」  
『ユリイカ』'74.8
- ：「言葉・人間・ドラマ」中村雄二郎，青土社，'81.7.18 ←「言葉・人間・ドラマ」，講談社  
'70.8←「コトバとA. アルトーの＜残酷の演劇＞ — 言葉・人間・ドラマ」『文学』，'69.2
- ：「アルトー＜トラユマラ＞」伊東守男訳，ペヨトル工房 鷹赤児『日本読書新聞』，'81.7.27
- ：「生きているアルトー」利光哲夫『心』34（7・8）'81.8
- ：「アルトーの反キリスト幻想」篠田知和基『名古屋大学文学部研究論集79』'81
- ：「残酷と異化 — アントナン・アルトー論」宇野邦一『群像』36（9）'81.9
- ：「演劇と狂気」島弘嗣『現代思想』9（11）'81.10
- ：「主体から身体へ1」高橋純『小樽商科大学人文研究』62，'81.12
- 1982：「A. アルトーのヘリオガバルス伝について」小笠原真一『仏語仏文学研究』14，'82.2
- ：「アルトーあるいは演劇」齊藤公一『ヨーロッパ文学研究』早稲田大学創立百周年記念，'82
- ：「インタヴュー，アルトーの残酷・演劇の肉体」寺山修司，「演劇の上演」今野裕一，「ジェ  
ニカへの手紙」篠田知和基訳，「過剰の演劇」M. プレネ，利光哲夫訳，「インタヴュー，  
言語の肉体 — 俳優とその影」鈴木忠志，「アントナン・アルトーと《チェンチー族》」M.  
ワッセルマン，箱山富美子訳，「アントナン・アルトーの《チェンチー族》」R. ドーマル，  
利光哲夫訳，「見るべきスペクタクル」コレット，利光哲夫訳，「ガラス玉と血沫」安堂信  
也，「アルトーの十字架」篠田知和基，「膜・釘・運動」梅本洋一，「アルトー演劇年譜」遠  
藤，以上「夜想」6＜特集アルトー上演を生きた男＞，'82.5.10
- ：「『チェンチー族』は呼吸する」梅本洋一『新劇』29（8），'82.8
- ：「肉体と言語 — アルトーとジュネをめぐる — 」梅本洋一『演劇学』23，'82
- ：「アルトーへの道」「土星の徴の下に」S. ソンタグ，富山太佳夫訳，晶文社，'82.12
- 1983：《L'idée du théâtre chez Artaud et les caractères ontologiques de l'affectivité》，  
Takahashi Atsushi，『小樽商科大学人文研究』65，'83.3
- ：「息を吹き入れられたことば」梶谷温子・野村英夫訳，「残酷演劇と上演の封鎖」若桑毅訳，  
「エクリチュールと差異」下，ジャック・デリダ，法政大学出版局，'83.6←《La Parole  
soufflée》《Le Théâtre de la Cruauté et la Clôture de la Représentation》*L'Écriture et  
la Différence*，Jacques Derrida，Seuil，'67

- ：「アルフレッド・ジャリ劇場」上野陽一訳，「アルフレッド・ジャリ劇場 初年」上野陽一訳，「挫折した演劇のための宣言」上野陽一訳，「アルフレッド・ジャリ劇場 1928」上野陽一訳，「アルフレッド・ジャリ劇場 1930」及川広信訳，「サムライあるいは感情のドラマ」上野陽一訳，「賢者の石」及川広信訳，「もう大空はない」上野陽一訳，「アントナン・アルトーへの導き」アルチュール・アダモフ，及川広信訳，「演劇の人」ジャン・チボード一，及川広信訳，「不可能な演劇」ポール・テブナン，坂東光之訳，「より明晰に理解する為に」ガストン・フェルディエール，坂東光之訳，「俳優を狂気にする」坂東光之訳，「演劇と科学」坂東光之訳，「神の審判とけりをつける為に」坂東光之訳，「アルトー論，演劇的行為あるいは行為する演劇」坂東光之，「私論アントナン・アルトー，私たちの“場の演劇”のために」及川広信，「なぜ，いまアルトーか」編集部，「演劇の人，アントナン・アルトー，その循環する苦悩の生涯」及川広信編，「アントナン・アルトー主要参考文献一覧」及川広信編，以上『肉体言語』＜特集アントナン・アルトー＞肉体言語舎，'83.10.10
- ：『寺山修司演劇論集』寺山修司，国文社，'83
- 1984： *Europe, 62<sup>e</sup> année, N°667-668, Antonin Artaud, nov-déc '84*
  - ：「バロックと現代演劇 — クローデル，アルトー，ゲルドロード，オーディベルティ」利光哲夫，『ユリイカ』16（3）＜特集バロック — “知”と“悦楽”の混沌＞，'84.3
  - ：「主体から身体へ — 2 — 言語学的規範の成立と言語外的現実」高橋純『小樽商科大学人文研究』67，'84.3
  - ：「聴くことの愉悦に向かって」梅本洋一『ユリイカ』16（7）'84.7
  - ：「境界と亀裂 — アルトーとドゥルーズ＜ドゥルーズ＝ガタリ＞」宇野邦一『現代思想』12（11）臨増，'84.9
  - ： *Portraits et Gris-Gris*, Florence de Mèredieu, Blusson, '84
- 1985：「アントナン・アルトー論ノート — 1 — 「水」の回帰あるいは誘惑」石井直志『ヨーロッパ文学研究』（早大）32，'85.3
  - ：「身体・アルトーの旅」『意味の果てへの旅 境界の批評』宇野邦一，青土社，'85.3
  - ：「プラトーとペスト — アルトーの見たパリ」『風のアポカリプス』宇野邦一，青土社，'85.12
  - ：「アルトー・バリ島・メキシコ」小沢秋広，GS 3，'85.10.15
- 1986： *Antonin Artaud, Dessins et Portraits*, Paule Thévenin et Jacques Derrida, NRF Gallimard, '86 → 「アルトー／デリダ デッサンと肖像」ポール・テブナン編，松浦寿輝訳，みすず書房，'91
  - ：「アルトーの残酷演劇と分身 double について」坂原真里『仏文研究』（京大）16，'86.1
  - ：「主体から身体へ — 3 — アントナン・アルトーの＜肉の位置＞」高橋純『小樽商科大学

- 人文研究』71, '86.3
- :「ピエール画廊におけるバルテュス展」『バルテュス』渡辺守章訳, 白水社, '86.6
- :「ヴァン・ゴッホ」栗津則雄訳, 筑摩書房, '86.10 ←新潮社, '71.4←「芸術新潮」'69
- :「主体から身体へ — 4 — アルトーにおける演劇の解体」高橋純『小樽商科大学人文研究』72, '86.9
- :「器官なき身体のプロセス — アルトーとドゥルーズ」『外のエティカ』宇野邦一, 青土社, '86.11
- 1987:「アルトーにおける病と家族」岡本健『フランス文学語学研究』(早大) 6, '87.1
- :「主体から身体へ — 5 — アルトーにおける経験の論理と情動生」高橋純『小樽商科大学人文研究』74, '87.8
- 1988:「演劇と神々」坂原真里訳, 「思考の不可能性」石井洋二郎訳・解説, 清水徹訳, 「詩への反逆」高橋純訳, 「<チェンチ>の向こうへ」高橋純, 「J'aime le cinéma (邦文)」丹生谷貴志, 「アルトーの<渴望>と現在」太田省吾, 「アルトーを基点にして」徳田良仁, 「シュルレアリストたちと南方」岡谷公二, 「モクテスマの再生」野谷文昭, 「レイト・アヴァンギャルド時代のアルトー(討議)」宇野邦一, 中沢新一, 「基底材を猛り狂わせる」*Jacques Derrida*, 松浦寿輝訳, 「思考は記号を発する」Philippe Sollers, 松本雅弘訳, 「新たな肉体」朝吹亮二, 「病人の側で」梅本洋一, 「力の詩学 — アルトー序説」宇野邦一, 以上『ユリイカ』20 (2) <特集アントナン・アルトー — あるいは<器官なき身体>, '88.2
- :「主体から身体へ — 6 — アルトーの生あるいは思考の量子状態」高橋純『小樽商科大学人文研究』75, '88.3
- :「狂気の詩人アルトーとともに — J. プレヴェールの日記 — 1~3 — 」嶋岡晨『詩学』43 (8) '88.8, (9) '88.9, (10) '88.10
- :「アルトー: シュルレアリスム体験から残酷演劇へ」坂原真里『仏文研究』(京大) 19, '88.9.1
- :「<チェンチ一族>をめぐって — 伝説と創造のはざま」岩本和子『近代』(神戸大), '88.12
- 1989:「四重の会のためのプログラム — アルトーの身体のパリセミー」岡本健『早稲田大学大学院フランス文学語学研究』8, '89
- :「神の裁きと訣別するため」「残酷劇」「神の裁きと訣別するためをめぐる書簡」「神の裁きと訣別するため」宇野邦一訳, ペヨトル工房, '89.7.14
- :「主体から身体へ — 7 — 「精神」の目的論から「肉体」の自由へ」高橋純『小樽商科大学人文研究』78, '89.8
- :「アルトーにおける<演劇と文化>」坂原真里『仏文研究』(京大) 20, '89.9.9
- 1990:「アルトーと空虚」秋田谷覚『中大仏文研究』22, '90
- :「アルトーにおけるメキシコ以後の演劇」坂原真里『仏文研究』(京大) 21, '90.9.8

- : *Vies et morts d'Antonin Artaud - Le séjour à Rodez*, Simon Harel, Collection L'Univers des discours, Le Préambule, '90
- 1991 : 《La Conférence au Vieux-Colombier, Antonin Artaud》 *L'Infini* 34, '91.5
- : 「アルトーの二つのく上奏文」 高橋純 『小樽商科大学人文研究』 82, '91.8
- : *La naissance de la poésie - Antonin Artaud*, Jean - Michel Rey, Editions A.M.Métailié, '91
- : 「アルトー／デリダ デッサンと肖像」 ポール・テヴナン編, 松浦寿輝訳, みすず書房, '91
- ← Antonin Artaud, *Dessins et Portraits*, Paule Thévenin et Jacques Derrida, NRF Gallimard, '86

## 註

- 1) 本稿末尾の文献年譜作成に当たり、『フランス語フランス文学文献要覧』（戦後篇1945～87/88の巻まで）、『日外アソシエーツ、音楽・演劇・芸能に関する雑誌文献目録』（1948～1984）、『国立国会図書館雑誌記事索引』（1948～1990）、『演劇年報』（1967～1989）を参照した。『国立国会図書館雑誌記事索引』については、文学、演劇、アルトーの項目で検索を行った。アルトーは多様なテキストを残しているため、文献も様々な項目に渡っている可能性がある。また、戦前の資料についてはもちろん、『図書新聞』のコラムが挙げた翻訳紹介が文献目録に認められなかったことからしても、我々の調査が十全を尽くしたものとは言えない。資料の充実と正確さを期すために、誤記や欠落にお気づきの向きは、ご教示下さい。
- 2) 金関寿夫、「四条越屋町下がる — 28 — 「世界文学」と京都リトル・ルネサンス — 雑誌検閲・翻訳のことなど — 2 — アルトオはじめ続々と掲載」『図書新聞』N°137, 1979・1・13 金関は、早い時期の文献としてもう一点、篠田一士の翻訳（昭和27年の『ユリイカ』）を挙げている。しかし、『ユリイカ』の第一巻は1956年に出ていることから、間違いではないかと思われる。
- 3) Alain et Odette Virmaux, *Artaud-un bilan critique*, Belfond, 1979
- 4) 拙稿（1986, 88, 89, 90）は、微力ながらその試みである。なお「アルトーにおけるメキシコ以後の演劇」『仏文研究』第21号（1990.9.8）に次の記載ミスがあったことを、この場を借りて訂正します。

p.135 1.4 D'un Voyage aux Pays des Tarahumaras → （下線を取る）

1.18 <①～⑫> → <①+⑤+⑦+⑧+⑨+⑩+⑫>

p.138 1.26 1936年の「ペヨトルのダンス」→1936年を1937年に

## 主要参考文献

*Le Théâtre en France 2*, sous la direction de Jacqueline de Jomaron, Armand Colin, 1989.  
 Christophe Deshoulières, *Le Théâtre au XX<sup>e</sup> Siècle en Toutes Lettres*, Bordas, 1989  
 福井芳男他編『フランス文学講座 4 演劇』大修館, 1977

日本におけるアルトーの受容

尾崎宏次他監修『写真集日本の新劇』ノーベル書房, 1990

管孝行『戦後演劇』朝日新聞社, 1981

扇田昭彦『劇的ルネッサンス』リプロポート, 1983

『別冊太陽 現代演劇 60's~90's』平凡社, 1991